

## 評価・IR 部署の業務整理と改善支援：まとめ

浅野 茂（山形大学 学術研究院(企画部) 教授）

山本 幸一（明治大学 教学企画部 評価情報事務室 副参事）

本セッションは、昨年度の試行的な実施を経て、今回、実施させていただき運びとなりました。その背景には、日本の大学において、インスティテューショナル・リサーチ（IR）を導入し、データに基づく意思決定支援を推進しようという機運が高まっていることがあります。一方、本日も参加いただいた皆様の大学においても、少なからず問題としてあるのは、現場で IR 業務に携わっていらっしゃる多くの方が何をしたらよいかを理解できないまま日常の業務をこなされていたり、大学執行部が IR に何を求めるのかを示すことができず、現場と執行部で誤解や葛藤が生じている実態があったりするのではないのでしょうか。

こうした実践的な課題に対して、多くの IR に係る既存研究は IR の成立背景や概括的な事例紹介に重きが置かれ、意思決定を支援するという IR の最重要機能について焦点を当てた研究は、米国でも、それほど深く掘り下げられていない実情があります。そこで、メイン州立大学アーガスタ校の本田さんとともに開発し、日米の各種調査における共通の枠組みとして設定しました。これらの成果を用いて、本セッションを進めさせていただきました。

本セッションの問題意識にあるように IR 業務について、担当者は何をしてよいか理解できず、大学執行部は何を求めたらよいか分らないという黎明期にあります。そこで「IR は何をすべきか」という視点での意見交換や研究を行うものの、現況を大きく変化させることは困難でした。本セッションの第1部では、「IR 業務をいかに効率化するか、効果的にするか」という従来と異なった枠組みを適用したことによって、IR 業務の目的を明確化し、日常的な業務を変化させるきっかけになりました。

次に、意思決定・改善支援を推進するうえで、評価・IR 担当者として何ができるかを考えるうえで、参考となる「ゴミ箱モデル」を紹介しました。演習では、ゴミ箱モデルでいう「解」に注目しました。ある課題に対して、どのようなデータをどのように分析していくのか、相互に論評しあうことで IR 担当者の分析能力の向上にも寄与したものと思います。また、データ提供のタイミングである「場（参加者）」は、IR 機能を向上させるための知見として、蓄積すべき項目であると感じました。IR 担当者が同じような立場に置かれることは十分に想定され、事前にゴミ箱モデルで示された事例があると、未経験の分野のデータ分析にも取り掛かりやすくなるのではと感じました。なお、ゴミ箱モデルについては、蓄積方法の工夫が必要かも知れませんが、今回のような研修会を重ね、事例が増えることで、IR 事例集のような形でまとめられるのではないかと感じています。

本セッションでの作業を通じて、評価・IR 部署で収集・作成したデータを、どのようにして意思決定や学内の改善支援に転換させていくことができるのかを、参加者のみならず、本報告書をご覧いただいた皆様に参考いただけることを祈念しております。